ミニシンポジウム記録 水産教育の現場から次世代育成を考える

4. 水産・海洋系高校教員減少を現場から考える
—水産科教諭が語るその魅力とは—

長岡智子

京都府立海洋高等学校

4. Charm of work as a fisheries and
marine high school teacher

TOMOKO NAGAOKA

*Kyoto Prefectural Fisheries and Marine High School,
Miyazu, Kyoto 626-0074, Japan*

1. はじめに

水産・海洋系高等学校は全国に46校あり、約10,000人の高校生が水産・海洋関連産業を牽引する人材を目指して、教科「水産」を履修している。一方、教員の大量退職は今後も数年間続くと見られ、水産・海洋系高校でも教員不足が懸念されており、高い専門性を備えた優秀な人材の安定確保が急務である。現状を踏まえ、水産・海洋系高校の存在と教育実践の一端、そして水産科教員の魅力を知っていただく機会にしたい。

2. 水産・海洋系高校とは

専門学科では、教室で行う座学の他に、週1～3回設定されている実習科目がある。地域の実態や学科・コースの特色等に応じた課題を設定し、各科目で習得した知識や技能を有機的に活用して、問題解決に向けた学習を展開している。また、職業資格取得のための授業・実習等もある。本校は「海のスペシャリスト」育成を目指す近畿唯一の水産・海洋系単独専門高校である。3学科4コースを設置し、文部科学省「環境のための地球規模の学習及び観測プログラム（グローブ）」、京都府教育委員会「スペシャリストネットワーク京都」等の指定を受け、関連機関や地域との連携の下、専門的な研究活動を推進

している。

3. 水産科教員の魅力

各都道府県に設置されている水産・海洋系高校は約1校であり、教諭として採用された場合、異動することがほとんどない。それゆえ、自らの教育活動を長期にわたって考え、計画的に実践に移すことができる。本稿ではその魅力のうち、2点を挙げる。

1点目は、学校現場に居ながらにして、自らの専門分野を活かして、地域の活性化に貢献できることである。水産・海洋系高校の教育実践は、校内に留まらず、地元産業や外部機関、他校種等との協働を通して充実し、深化する。生徒と共に地域の課題に取り組み、新たな発見や経験を共有したり、高校生の柔軟な発想や行動力が課題解決につながったりしているといった教員ならではの感動もある。取組を通して生徒の自己有用感が育まれ、地元水産業の担い手として逞しく成長する姿を間近で見られるのも、この職業ならではの魅力である。

2点目は、生徒を卒業後も見守り、交流できることである。本校で身に付けた知識や技能を活かし、地元で就職したり、上級学校進学後に地域や関連産業等で活躍したりする卒業生の様子を知ることは、教員にとって最も嬉しく、誇らしいことの1つである。また、卒業生から得られる情報は、時代や地域のニーズを知り、自らの教育実践の在り方を見直すきっかけになる。さらに、生徒の職業観や勤労観を育むためのキャリアモデルとしても貴重な存在である。

4. おわりに

教育とは生徒と未来を語ることと言われる。日本の水産業は様々な問題に直面している。しかし、その解決に向けて懸命に取り組む高校生の姿は、私たちに使命感を超えたやりがいを授けてくれる。